

飛騨高山・白川郷探訪記 二〇一六年一〇月八日(土)〜一〇日(月)

一九九九年の一〇月、結婚二五年を記念して、飛騨高山と、馬籠・妻籠・奈良井宿の木曾路を巡る銀婚旅行を敢行した。カメラを用意してあったのだが、出かける直前に落としてしまい、銀婚旅行は写真無しとなってしまった。旅行そのものは思い出深く、脳裏にくっきりと写って、帰宅してから、ことまかに旅行記を書きあげ、後に本にした。

今回の旅行は、正に銀婚旅行の再現で、高山を写真で撮りつくそうと言うものである。

八日(土)

夜になって、早目に入浴と夕飯を済ませ、家を二〇時三〇分頃に出て、飛騨高山に向けて車を走らせた。夜の目的は、高速道路のサービスエリアで仮眠して、早朝に、松本〜高山に抜ける計画だった。関越道・花園IC〜上信越道〜長野自動車道・松本ICに出るコースで、松本ICの手前、梓川SAで仮眠を取ることにした。高速道路は、三連休ではあるものの、初日の夜間と言うこともあって全く渋滞は無く、休憩をはさんでんびり走っても、二三時には梓川SAに着いていた。

サービスエリアは、我が家と同様、車中で仮眠を取る人がいるらしく、いかにも仮眠を取っている態勢の車が、既に二〇台以上駐車していた。自己中心に考えると、明朝、飛騨高山に向かう車が多いと思われたが、よく考えてみると、連休中であり、上高地に多くの観光客や登山者が集まる季節でもあった。四〇数年前、一〇月上旬に、職場の仲間と北アルプス、北穂高、槍ヶ岳を縦走したことがあり、山々は紅葉が真っ盛りだった。季節的には全く同じで、サービスエリアで仮眠している車は、高山よりも、上高地周辺に向かう人の方が多いのかもしれない。

梓川サービスエリアは、一九九九年の銀婚旅行とコースが同じで、早朝に立ち寄った事がある。

※(小説)「時の旅人 5 時の旅人」のくだりから

※梓川の清流を越えると、松本の町並みが見えてくる。高速道を下りる前に、一服しに梓川サービスエリアに立ち寄った。未だ九時前で、中途半端な時間帯ということもあって、停車している車は少なかった。レストラに入っても客は一人もおらず、営業中の看板が出ていたが、従業員は清掃や準備をしていて、態勢が整っていないかった。むしろ準備中の感があり、あまり期待せずにコーヒを注文する。

のんびりと語り合いながら、モーニングコーヒを賞味すると、思った以上に円やかで、こくのある味わいだった。「美味しいな」と言って、妻と顔を見合わせ、「片手間に入れたコーヒではないな」と、お互いに認めていた。思いがけない美味いコーヒを味わい、疲れが幾分抜けて、会話が弾んだ。※

一七年がたって、梓川サービスエリアの事情は全く異なり、レストランは元より、コンビニもあって二四時間営業となり、仮眠の旅行者にとっては非常に有難いサービスエリアだった。夜食をとって一息入れ、車に戻ると雨が降ってきた。車後部にしつらえた寢床は完全にフラットとなり、寝心地は問題ないのだが、室内は気温が高めで、雨も降ってきたので窓も開けられず、毛布一枚でも寝苦しく、寝つきが悪かった。

九日(日)

五時に起床すると、昨夜降り出した雨は降り続いていた。銀行旅行で訪れた時も松本〜高山は雨に見舞われ、時々大雨になる始末だった。今回も、大雨までにはならなかったものの、国道一八五号は間断なく降り続く、神経を使う走行で、銀婚旅行の再現を思わせた。そもそも、飛騨高山を目指すのは、高山祭りだけでなく、古の風情を漂わす、情緒溢れる町並みを闊歩して、正に、銀婚旅行の再現をも意識していた。

早朝のドライブだと言うのに、山間に入って行くにつれて車の数が増していき、信号が無いので渋滞までには至らなかったものの、昨夜想像した通り、上高地へ向かう車が大挙して押しかけていた。上高地入口周辺ではバスターミナルが幾つもある、既に多くの車が駐車してあった。パーキングにはテントも張られていて、高速SA利用と同じ役割を果たしていた。安房トンネルを過ぎてから車の数が疎らとなり、それでも高山に向かう車も少なからずあった。

雨は強弱を繰り返し、止む間もあって期待させる時もあったが、高山についても雨模様だった。銀婚旅行の時も高山では雨に見舞われ、しぶとくも、相合傘を気取って町を練り歩いた。カーナビにセットした駐車場に七時半に到着すると、駐車場は車で七割程うまっていたが、問題なく駐車場所を確保できた。情報では九時には各所の駐車場が満杯になり、車を駐車することすらできないそうである。八時前に到着するよう、夜行にし、

松本から高山まで二時間と見積もって車を走らせ、祭り見学の最難関をクリアできた。

駐車場に止めてから、少し車で休憩して町に繰り出したが、小さな折りたたみ傘を各自が持って雨を凌ぐよ
り、銀婚旅行と同じように相合傘にしようかと、わざわざ車に戻って、大きな傘を一本持って歩きた。祭り
関係者らしき人に、祭りの状況を聞くと、午前中は雨で動かないとのこと。これ幸いに、町中探索に方針転換
し、高山祭は意識せずに、町並み見学となった。

最初に訪れた、下一之町の町並みも奥ゆかしい建物が多く並んでいたが、一七年前に相合傘で練り歩いた印
象と違って、特に道幅が広く感じられ、側溝に蓋がされているのも違っていた。安全の問題があつて側溝
が塞がれ、それによって道幅が広く感じられるのか、疑問を払しょくできないものの、納得するしかなかった。
道筋を替えて、下二之町も歩いてみたが、銀婚旅行の印象と全く異なり、そもそも、前回は幾筋も歩いておら
ず、格子戸のある情緒溢れる町家が長々と続いてきたように記憶していた。

※町家建築と言われる、江戸時代から営々と続く家々が、道の両側にぎっしりと軒を連ねていた。飛騨の匠の
技と、心意気が凝縮された建造物で、ただ単に古さだけが引き立つわけではなかった。格子戸の造りだす規則
的な陰影が郷愁を誘い、日本人が本来持っている固有の美意識をくすぐる、美しさも兼ね備えた町並みだった。

町並みは美しさと合わせ、機能性も考慮されており、防火や融雪の用水路として道路の両側に側溝が造られ
ている。雨が降っていても雨垂れや水溜まりを気にしないで散策を楽しめる。現代でも充分通用する町並みで、
むしろ、安直な住宅政策や道路政策で精一杯の現代行政を考えると、高山の町家造りは遥かに進んでいる。※
※銀婚旅行で呼んだ詩

道行き

飛騨高山をおとずれし 銀婚夫婦の道行きは

仲をやっかむ神々の 機嫌損ねて雨降りに

二十五年の歳月は 雨も二人の小道具と

相合傘としやれこんで 恋心を呼び起こす

時の流れをさかのぼり 新婚夫婦の道行きと

腕組み合うも心地よく 古き町並み闊歩する

夢

情緒漂う格子戸の 小さな店を覗き込み

お目当ての品手に入れて 見合わす顔が華やいで

瞳輝くおりおりの 妻の姿がいとおしく

雨にぬれると引き寄せて 温もり胸に包み込む

夫婦の年輪かえりみて 妻のひとみに重ねつつ

時を旅するおしどりの 夢覚めぬ事願うなり

午前中、雨で屋台は出ていなかったが、屋台曳き揃えとなる参道近くには、幾つもの展示館があり、見方に

よっては、祭の合間、見学時間がしつらえられているようでもある。旅行計画でも見学を含んでいたもので、空き時間の穴埋めも兼ねて「高山祭屋台会館」「桜山日光館」「からくりミュージアム」を見学、優等観光客を演じるようになった。それぞれに見応えがあり、考えようによってはこの三館を見れば、短時間で高山の特殊性と、高山祭りのなんたるかが知ることができ、祭りに合わせて訪れなくともいいと言いうことになる。

各会館とも商魂たくましく、まずは、高山祭屋台会館の入口で、無料で写真を進呈するとの建前で、撮影サービスがあり、どうせ高額で売りつけられると想定、高山祭の懐事情も鑑み、申し出に応じて撮影を了解した。案の定、会館出口に写真が展示されていて、実態が分からない小さな写真と、2Lサイズ？の写真が差し出され、2Lサイズを売りつけられた。我が家にはプリンターがあり、A3サイズでもせいぜい50円程度でプリントアウトができるが、販売額は一三〇〇円だった。桜山日光会館でも同様で、こちらでは一五〇〇円で売りつけられた。額は小さいが、押し売りや、おれおれ詐欺の類で、高山の印象をどこまでも悪くした。桜山日光会館の展示物は、一七年前の、一つの大きな円形の台に、日光東照宮の十分の一の大きさの模型だったのが、今は展示台が何か所にも分かれ、模型が大分大きくなっていった。

※「高山屋台会館」は、桜山八幡宮の傍らにあつて、秋の高山祭で引き回される十一台の屋台のうち、四台が交代で展示されている。「高山祭」は春と秋年二回行われ、秋の高山祭は桜山八幡宮の例祭で「八幡祭」とも呼ばれている。

まずは桜山八幡宮で、子供たちの幸福と銀婚旅行の安全を祈願し、その後、屋台会館を見学することになった。高山祭も是非見たいと思うが、混雑を考えるとその気になれず、わざわざ日程をずらして今回の旅行となった。屋台会館で「少しでも祭りの雰囲気味わえれば」と思って訪れたが、祭り気分にはなれず、屋台一つ一つの、見事な出来栄えを堪能するしかなかった。

自分が住んでいる熊谷にも、高山と同様「うちわ祭り」と呼ばれる、祇園祭りがあつて、屋台の曳き廻しもある。熊谷の屋台も立派だと思っていたが、高山にはとても及ばない。飛騨に対する知識は乏しく、「匠の里」として、飛騨から多くの名匠を輩出していることを、今回の旅行で知った。

高山屋台会館の向かい合わせに「桜山日光会館」と言う展示館があり、日光東照宮の十分の一の大きさの模型が展示されている。ただ単に簡易なミニチュアではなく、木工、木彫、彫金、彫漆など、飛騨の匠の技の辣腕振りど、心意気が披瀝された造形物で、精緻を極めた芸術だった。

飛騨の地域性で、冬になると雪に閉ざされ、地道な作業をこつこつと積み重ねて培われた技術が、匠となったのであろう。匠の技を支えてきたのは、同じことの繰り返しを、辛抱強く続け、より精密な技術を体得した者であり、偉大なる凡人でなければ、成しえない世界なのかもしれない。※

高山祭見学を目指して、この一年、六店舗（熊谷周辺）の書店で、何度も観光情報雑誌をあさってみた。売れ筋は表表紙が見えるように置かれ、売れゆきがそれほどない情報誌は、背表紙状態で置かれている。高山が表表紙で展示されていたのは一度だけで、人氣が衰退していると想像された。一七年前の銀婚旅行で情報誌をあさった時は、高山は表表紙が普通だった。その差が本当に人氣のパロメーターになるか、定かでないが、実際に高山に来て、衰退傾向に感じられた。尚、購入した情報誌では、桜山日光会館の名は出てこなかった。熊谷うちわ祭も、二〇年程前に衰退傾向にあつたが、こころはすっかり盛り返し、昨今は毎年大変な賑わいである。昨今の傾向を分析するなら、子どもと女性の参加が格段に増え、屋台と屋台が出遭うと太鼓の叩き合いが行われるが、女子の割合がかなり高くなっている。昼間の曳き廻しでは、子供の囃子が中心となり、後継者の憂いを払しょくする、元氣のいい叩き合いを披露している。高山祭では、女子と子供の役割が小さく、花が感じられないので面白みに欠ける。

からくりミュージアムでは、今までのからくり人形（屋台と切り離されている）の実演があり、演目は五目で、観客は少なく、五目とも写真が存分に撮れた。後で知った事だが、屋台に搭載されたからくり人形は一台だけのことだった。からくりミュージアムでは、写真の押し売りも無く、見学の甲斐があつた。

その後も下一、下二、上一、上二の町並みを探索したものの、スッキリしないままに昼食時間となり、食事処を求めて宮川（朝市が立ち並ぶ川）を渡った。渡ったすぐのところの幾つか食堂があつたが、どこも行列ができていた。宮川からさらに離れていくと、細い道筋に全く並ぶ人のいない店を見つけ、ためらわずに入店した。

昼食を済ませると、すぐに、高山祭、屋台曳き揃えの場所に向かった。既に屋台は並んでいて、それほど広

くない参道なので、屋台の周りには人ばかりができていた。屋台のきらびやかな威容が展望できるが、写真を撮るには、見物客がはだかつて思うようにならず、人混みの中へ割り込んでいくようだった。

屋台には飾り物が多くあしらわれていて、飛騨の匠の技が凝縮し、高さが七、八メートルもあって、絢爛で豪華だった。一〇台の屋台（からくり奉納を行う布袋台は加わらず）、一台ずつできるだけ全貌を撮るようにしたが、人垣は解消せず、最下部まで写しきれなかった。一通り撮り終わると、今度は裏側に回り、可能な限り撮影を試みた。

基本的には、屋台が立ち並んでいるだけで、少しも動きが無いので、単なる展示会に過ぎなかった。途中から幾らか動きが出てきて、お囃子や獅子舞いが披露された。人混みは大分緩和してきて、屋台の下部にもカメラを向けて、一連の写真とはならなかったが、全部の屋台の、ほぼ全貌を撮りつくした。

途中から屋台の曳き廻しの気配が出てきたので、資料に出ている曳き廻しの順路を確認、先回りして撮影しやすい道端を見つけ、待ち構えた。すぐに屋台がやってきたが、だからと通り過ぎ、見どころの乏しい曳き廻しだった。曳き廻しには子供も行列に加わり、愛らしい姿が見られたのが収穫だった。

十一台全てが曳き廻しに加わると思っていると、結局四台だけで、待てども収穫は無しだった。曳き揃え場所に戻ると、再び屋台台が並んでいて、動きはなかった。

ともかくにも、待たされる時間が長く、観光客から見ると、間延びした祭である。

午後になって、桜山八幡宮境内で、屋台のからくり奉納が行われるとの放送があり、時間調整をして見学に加わった。それほど広いとは思われない境内は、観客で埋まっていき、三〇メートルほど離れた場所の人の波に加わり、からくりが始まるのを今か今かと（三〇分程）待った。幸い、前に立ちはだかる観客は小柄な方が多く、小柄な自分でもからくり人形がすっきり見通せた。

幸運と想っていたら、からくり奉納が始まる寸前に大柄な熟年（六〇歳前後？）男性が強引に前に割り込んできて、完全に視界を遮られる形となった。自分のポジションは多少横に動く余地があり、ファインダーに多少の影が入っても、からくり人形をとらえることができた。ところが、熟年男性は体を左右に動かす癖があるらしく、右へ左へと何度も揺れ動いていた。右隣の中年男性（四〇代？）が、事情をくんで声をかけてきてくれて、右側のスペースを開けてくれた。熟年男性の動きに応じて、右へ、左へ動いたり、背伸びをしたりして、何とか最後まで撮影することができた。

からくりミュージアムと同様、カメラの連写機能をフルに使って六三〇枚程撮影、コマ送りの写真がたっぷり撮れた。

余計な話になるが、金沢の百万石まつりでも、高齢者が、周りの子供たちが座って見学しているのに、一人椅子に座って撮影の邪魔になった。

からくり奉納の後には、一八時以降の宵祭りを残すだけとなり、午前中見きれなかった上三之町の見学に向かった。道筋を間違え、午前中入りこんだ町筋に出て、たまたま土産を買うことになった店で、思い出に残るウサギグッズの店と、手焼き煎餅の店を訪ねると、一筋違いと分かり、上三之町へ急ぎまわった。上三之町の道筋に出ると、結婚旅行の時の記憶と一致する風景が長々と伸びていた。

上三之町の道幅は、一や二より狭く、側溝にはほとんど蓋が施されてはいなかった。飛騨高山で最も人気のある町並みで、祭りに関係なく、観光客でこった返していた。人の流れは途絶えず、観光客ごと写真を撮りながらお目当ての店を探し、女房殿（兎年）待望のウサギグッズの店に辿りついた。店は鰻の寝床の様に奥行きがあり、奥にはウサギをモチーフにした絵が展示されていて、製作者？と思われる女性に撮影について尋ねると、アップでなければいいとのことだった。女房殿は勿論ウサギグッズを購入、嬉々としていた。さらに、手焼き煎餅の店を訪れ、焼き立て煎餅も賞味した。

※妻のノートに、必見と位置づけられた「うさぎ」をモチーフにした、雑貨や小物などを扱う店を訪れた。妻はうさぎ年生まれで、以前からウサギグッズを集めてきた。趣味の乏しい妻にとって「うさぎ」を見つけ歩くのが、大きな楽しみになっており、旅行に出るとウサギの置物を見つけ出し、買い集めてきた。妻の部屋にはウサギ専用の棚があり、ウサギの小さな置物がぎっしりと並んでいる。

店に入る前から、妻の口元は自然にほころんで、ウサギだらけの、とっておきの世界に入ると、妻は何のけれんみもない、夢見る少女にすっかり変身していた。その可憐さは、私の心を捕らえて離さなかった。

ウサギの形をした、陶器、硝子、木工、布細工、紙細工や、ウサギが描かれた絵皿、布製品、紙製品など、

ウサギグッツが所狭しと並んでいた。鰻の寝床のように奥行きのある店で、展示された品物の数は尋常ではなく、妻は食い入るように、一つ一つを丁寧に品定めをし、時間をたっぷりと費やした。

他では手に入りそうもない、珍しい品物が数多くあり、妻は心を動かしているようだったが、値段との折り合いが付かないと判断したのか、お目当ての品を元に戻し、次の品物へ視線を移そうとした。

「気に入ったのがあるなら買えば」と促すが、「高いからよしとく」と言いつて、次へ足を運ぼうとした。

「他では手に入らないかもしれないぞ」と、妻を制止するが、少し考えて、「でもいいわ」と言いつて、諦めようとした。

少しじれったくなり、「せっかく高山まで来たんだから、気に入ったものがあるのに買わない方が勿体ないんだぞ」と、叱るように言いつて、妻のお目当ての品を手に取り、無理やり買うようにする。

値段が高いと言いつても高が知れていて、躊躇するような問題ではなかった。日常の生活でも、二人で買い物に出掛けると、妻は欲しいと思いつても、いつも買い控えており、「おとうさんも何か買わない」と言いつて、私も買わないと踏ん切りが付かなかった。

人並みの生活スタイルを維持するには、私の収入だけでは非常に難しく、余分なものをできるだけ省かないと生活が成り立たなかった。特に衣類が経費削減の対象となり、流行とかけ離れた、実用本位の安物で間に合わせるしかなかったが、妻は少しも不満を漏らさなかった。

安価で簡単に手に入るものでも、妻は無駄遣いを嫌いつて「簡単に手に入る」と言いつ、意識は持っていないかった。「欲しい」と言いつ気持ちをつぶらせ、安価なものでも非常に価値あるものとなつて、手に入れると、「やつと手に入った」との満足感に浸り、いかにも嬉しそうな顔をした。むしろ、貧乏暮らしの効用を、十分に享受していた。

妻が見せる、ためらいがちな仕種がいじらしく、私の心を無性に引きつけて、愛しさが一層募つた。たくさん買つてやりたいと思つたが、妻は、ウサギの小さな置物と、ウサギの模様が入つたレターセットを選び、それ以上は望まなかった。妻は、お目当ての品を手にとると、幾分頬を紅潮させ、いかにも嬉しそうな笑顔を返してきて、私を満足させた。※

上三之町の道筋を最南端まで進み、高山陣屋を見学すべく、宮川を渡つたが、既に一七時を回り、閉館となつていた。やむなく、来た道を戻り、宵祭に間に合うように、早目に夕飯を取ることにした。目についた蕎麦屋に入ってみると、相席だったがすぐに席に付けた。やや高くなつた畳の席につき、幾らか低い席が見渡せて、ふと、銀婚旅行の高山で、最初に入った蕎麦屋を思い出し、偶然にもこの店だと分かつた。

食事を済ませ、一八時予定の宵祭の会場、安川通りに急ぎ向かつた。一八時はとつくに回つていたが、屋台は全く見られず、気温が下がつてきて、立ちん棒で待たされるのは辛く、高山祭の悠長さに、いささか嫌気がさしていた。動きがあつたのは一九時間近で、宵祭の呼び物は、京都祇園祭と同様、屋台を回転させるところにあるようで、道筋から姿を見せると、屋台を九〇℃回転させ、大きな拍手が湧き起こつた。たまたま空いていた場所で見学、屋台が出てくる道筋まで一〇メートル程の特等席だったが、拍手をするような醍醐味は少しも感じられなかつた。

熊谷のうちわ祭は、京都祇園祭、高山祭と並んで、祇園三大祭と言われ、屋台の曳き廻しが中心である。広いエリアで屋台の曳き廻しが行われ、太鼓や笛のお囃子が間断なく鳴り響き、屋台が遭遇すると、向き合つて太鼓の叩き合いが繰り広げられ、動きの激しい勇壮な祭りである。うちわ祭とついで比較してしまい、あまりにもゆつたりとした動きに、面白みが少しも見いだせないと言つのが本音だつた。同様に四台まで見学したが、飽きてしまい、寒空でトイレが近くなつて見学は断念、予定では二一時まで行われることになつていたが、二〇時になつたところで宿に行つた。

宿は、三日前の、正に直前に予約したもので、迷いのあつた高山探訪を決意するに至つた。昨年も高山祭見学を目指したが、インターネットで宿の予約状況を確認すると、高額な宿しか空きがなく、探訪を諦めた。今年、宿泊を白川郷にすることも考え、何としても行こうと思つていたので、高山の宿が取れたのは、幸運だつたと言える。

宿泊料は朝食付きで八一〇〇円で、祭中としては格安だつた。駐車場は一台分しかなく、昼過ぎに宿を訪ねると置けると言つことで、有料駐車場から移動した。駐車代金は四時間半、一二五〇円で済み、二四時間以上駐車する事を考えると、最低でも四〇〇〇円は安くなる勘定で、二人分の宿泊料から差し引くと、二人

合わせて一二〇〇〇円前後で泊れることになる。

女房殿の、携帯電話の歩数と距離を見ると、二〇〇五〇歩、一二・四キロとなっていた。

値段の安さから、期待せずに宿に入ると、最近改装したらしく、トイレ、風呂ともに広く、清潔で、申し分ない宿だった。疲れていることもあって、横になるとすぐに寝付いた。

一〇日（月）

夜行の強行軍の旅だったが、よく眠れたこともあって、朝にはスッキリしていた。七時朝食で、食堂に降りて行くと準備ができていて、老夫婦の朝食にしては、豪華すぎる御馳走が並んでいた。女将手作りの味は、あっさりしていて、我が家には申し分ないもので、大いに楽しめた。女将との会話も弾み、高山の事情も聞かされた。高山も世間一般と同様に景気は良くないようで、観光客が大挙押し寄せる上三之町だけが内情が良く、経済的に大きな偏りがあるとのこと。高山祭りでも偏りは同じようで、確かに、昨日の上三之町の混み具合を考えると、我が家がそうであるように、多くの観光客は、祭見学より町並み巡りに力点を置いているようだった。

女将との世間話は、春の高山祭りにも及び、松本、高山間（国道一八五号）が冬季閉鎖で足が遠のく旨を話したら、女将は躍起になって冬季閉鎖を否定した。春の祭り、山王祭は、宿のある地域の祭りで、是非来てほしいとの思いが感じられた。春の祭りは四月一四、一五日に開催され、夏スキーが楽しめる乗鞍岳と、三メートル級の山々が連なる穂高に挟まれた道路と考えると、閉鎖になるなら関係なく、雪の影響が無いと考えるのは難しく、国道一八五号を選択するのは無理がある。女将の気持ちは理解できても、高山と縁が薄くなることは否めなかった。

心尽くしの朝食を済ませると、早々に上三之町に向かった。目論見通り上三之町の町並みは空いていて、写真撮るにはもってこいだった。

宿に立ち寄って挨拶をし、高山を九時一五分には出発、白川郷に向かった。当初の計画だと午前中は高山祭見学だったが、昨日のうちに祭りの実態はつかめ、写真を撮りつくしたと判断、白川郷見学に時間を多く取ることにしたのである。

一七年前は、白川郷の道のりは一般道のみで、六〇キロ以上？の道程があり、片道、二時間以上かかると思込まれ、探訪を断念した。その代わりに、高山の郊外にある「飛騨の里」で合掌造りを見学した。今は白川郷まで東海北陸道ができて、時間的には大幅に短縮でき、一〇時過ぎに到着、一時間かからなかった。

※高山市街から、少々山間に入ったところに「飛騨の里」はあった。入口の前にはみやげ物屋や食堂、レストランなどが並んでおり、観光客の受け入れ態勢は万全で、観光バスも多くやって来ている。

「飛騨の里」に一歩足を踏み入れると、そこは別世界だった。山間の森を切り開き、飛騨の各地から移築された、合掌造りの家々がバランス良く配置され、かつて飛騨の各地で見られた、長閑で奥ゆかしい山里を造り上げていた。入口の、行き過ぎた観光化に抵抗を感じていたのも忘れ、懐かしい故郷を訪れた気分になされた。

山里の生活など全く知る由もないのに、藁葺き屋根の家に一歩踏み込むと、言い知れぬ郷愁に包まれていた。囲炉裏のある部屋に上がると、薪の燃える音と香りとが、煙となって漂っていた。漂う煙が染み入るように身体を包み込むと、不思議と、気持ちがゆったりとなつて、本当にここで生活をしているような錯覚を起こさせる。

合掌造りの家は、囲炉裏から出る煙が家全体に漂って、防虫効果を発揮し、木材の朽ちるのを防いでいるようである。剥き出しになった木肌は、黒光りして、少しも傷んでいなかった。しかし、藁葺き屋根の葺き替えの問題や、間取り、炊事、洗面、照明などの生活様式の問題があつて、現代生活に共することができなくなり、多くが失われてしまったようだ。

妻に「大変そうだけど囲炉裏のある生活をしてみたいな」と話し掛けると、「一度は経験してみたいわね」と妻も同意してきた。

非常に便利になった電化生活を、捨てることなどできるはずがないのに、囲炉裏のある生活が「平凡で、時間に追われない、長閑な生活」の代名詞であるかのような気になり、幻想を抱いているようだった。

何もかもが人の手から離れ、限り無く便利になつても、一方で、余計なことに限り無く煩わされ、安らぎが少なくなっているのが、現代生活ではなからうか。多少は不便で、手間と時間を費やしても、決まったことを決まった通りに、毎日同じことを繰り返し、一日の無事を家族揃って味わえることが、最良と信じ、生きてい

けるほうが、むしろ幸福なのかもしれない。

山深い山里の、「ごくありふれた熟年夫婦となって、のんびりと、藁葺き屋根の家々を丹念に見学していった。木々は幾分色づいて、一層情緒を漂わせ、気分は最高だった。観光客が多く、時には進路を遮るように行き交っていたが、少しも気にならず、二人の世界に没頭した。

「刺し子の実演」との、看板が掲げられた家屋に入っていくと、煙が漂う囲炉裏端で、老婦人が、大きな紺の生地を広げ、縫い物をしていた。観光客は我々だけで、上がり込んで、囲炉裏に近寄っていくと、婦人は柔らかな笑顔で、二人を迎え入れてくれた。

「根気のいる仕事で、大変ですね」と、話し掛けると、手を休め、「お蔭様で、この歳になっても楽しく仕事をさせてもらっています」と、笑顔を絶やさずに答えてきた。

「お蔭様」との心意気を、身体全体で表しながら、いかにも楽しそうに、暮らしを語る婦人の顔つきは、温もりと気品に満ち、可憐に感じられ、心を打たれる思いだった。

誘惑に満ちた現代において、年若いでも品格を失わずに、心安らいた顔つきを持ち続けるのは、至難の業である。婦人は刺し子と共に、規則的な生活を営々と続け、常に家族と頼り頼られの関係にあり、一家の重要な柱として、生活してきたのであろう。そして、仕事を続けられることが、最良と信じ、一切の迷いを持たず、回りの者も優しさに満ち、幸福な日々を送ってきたのに違いない。

「こんなお年寄りも、まだ日本に存在するのか」と思うと、無性に嬉しくなってくる。同時に、自分が、妻が、年老いたとき、果してどんな顔つきとなるのか、想像していた。

妻の横顔に、老後の姿を映し出し、「妻も飛驒の老婦人のように、いつまでも温もりを湛えていられるだろうか」との思いを巡らし、一方で、自分の役割を強く意識していた。

妻をどれだけ深く愛し、自分がどれだけ優しくいられるかが、妻の顔つきとなって表れるのに違いなかった。そっと向けられた妻の笑顔は、私の心には、この上無い温もりが感じられ、妻がいつまでも、可憐でいて欲しいと、祈る思いだった。

正に、日本人の心の故郷を感じながら時間をたっぷりかけ、合掌造りの家々を見学して回った。時代に適合しないはずの生活様式に、むしろ、人が人らしく生きるための、理想を見た思いで、「飛驒の里」を後にする。

※銀婚旅行で呼んだ詩

気品

町の外れの飛驒の里 足踏み入れば別世界

合掌造りの家々の 知るはずもない生活に

何故か知らねど郷愁が 熟年夫婦を包み込む

煙漂う囲炉裏ばた 暮らしを語る老婦人

言葉の底に窺わす お蔭様との心意気

笑顔たやさぬ温もりが 気品となって心打つ

寄り添う妻の横顔に 老後の姿映し出す

我が人生の故郷の 灯火となるひとを知り

永久に愛情注がんと 気持ち新たに里を出る

連休中でも白川郷はそれほど混まないと予想していたが、最初に出てきた駐車場は入場規制がされ、一回り

して川の反対側の駐車場に向かった。行った先は河川敷の駐車場で、そこも大分混んでいたが、僅かに空きがあり、白川郷探索の起点となった。

白川郷にも続々と車が押し寄せてきて、高山が駐車場確保に苦慮しているのと同様、白川郷も予想以上の観光客で、長年、駐車スペースを確保するのに難渋してきているように思われた。駐車場確保が、観光客が上手くいく、いかないうの鍵を握っているのではなからうか。むしろ、行き過ぎた観光化に、足をすくわれることも考える必要がある。

駐車場の急な階段を登ると道路に出て、山沿いに幾つもの合掌造りの建物が見えて来る。その多くは手入れが行き届かない感じで、本格的な観光場所は別にあるようだった。道を北上していくと、山腹に合掌造りの集落が出てくる。道沿いに、山、川両側に合掌造りが出てきて、幾つかが有料展示館になっていた。何か所か入館、その内の一つで、高山の展示館同様、無料写真を進呈と勧誘してきて、女房殿は、さすがに断った。

道沿いに、姿を見せる合掌造りの写真を撮っていき、バスターミナルまで足を伸ばした。戻りながら昼食を取り、途中、川には吊り橋ができていて、吊り橋を渡って、野外博物館、合掌造り民家園に向いた。合掌造り民家が九棟あって、見応えがあった。

白川郷は四時間近い見学となり、写真もたっぷりと撮って、ほぼ見きった感がある。一四時には出発し、帰りは南下せずに、東海北陸道を北上、北陸道を通るルートを選んだ。計画段階では五箇山も見学して、夜行で帰るはずだったが、疲れが出て早目に帰ることにした。東海北陸道は、渋滞にならないまでも、思いのほか混んでいた。高山か、それとも白川郷か、連休で観光客が多く訪れて、帰宅していると考えるのが自然である。車のナンバーは、ほとんどが新潟ナンバーで、北陸道から上信越道に進むと、車は大分少なくなった。

六月の金沢探訪で記録した、帰路の距離と時間の目安があった。車の流れに沿って走っていくと、夕方には関越道に入ることになる。行楽シーズンの連休となると、上信越道、関越道ともに混雑することが考えられ、休憩を多く取って、遅めにつくよう調整、お茶休憩に必要以上時間をかけた。上信越道に入ると渋滞情報が出てきて、先ずは碓井軽井沢から渋滞と表示されていた。さらに進むと、関越道、寄居の名前がでてきて、中々解消しなかった。更埴JCTを越えると、今度は横川SA周辺の事故情報が表示された。本来なら思惑通りに推移していたのだが、事故まで予測できず、結局、渋滞にはまって、車三台の事故現場を抜けるのに三〇分程かかった。後は順調で、自宅に着いたのは二二時間近だった。

今日の歩行記録は、一二九五〇歩、七・九キロとなった。三日間の走行記録は、白川郷まで三三四キロ、自宅まで四四四キロ、合計で七八四キロとなった。帰路は一〇キロの遠回りである。尚、写真撮影枚数は二八〇〇枚を越え、一つの旅としては、今年六月の金沢探訪、二五〇〇枚を越え、最多となった。

※木曾路旅籠巡り・追記

高山探訪は、一九九九年に敢行した銀婚旅行の再現を意識していた。カメラを持たず、写真としては全く記録できなかつたので、取り戻しを意識し、写真撮影が目的の旅だった。銀婚旅行では木曾路巡りも加え、木曾路については、二〇一四年に一足早く再現させ、今回の高山探訪で完結するにいった。

銀婚旅行では、木曾路でも幾つか詩を作ったが、「木曾路旅籠巡り」の写真集では探訪記を作成しなかつたので紹介せず、飛騨高山・白川郷探訪記で追記することにした。

木曾路旅籠巡りでは、十五年の歳月が、旅籠を大きく変貌させ、人で溢れていた街道は、賑わいに乏しかった。馬籠宿で、地元の人に実情を聞く機会があり、観光客が、最盛期の半分にも満たず、経営の厳しくなった店が少なくないとのことだった。馬籠、妻籠、奈良井宿、どこでも同様で、街道が、人で満ち溢れるなど、夢の、また夢となっていた。観光客の三分の一近くは外国人で、日本人の多くが、目を向けなくなったのは明らかだった。

馬籠で泊った宿の、泊り客は、日本人は妻と二人、後は外国人が十人程だった。宿の主人を除く従業員も、やはり外国人で、古の旅籠は、外国人に支えられていると言うのが実情だった。

奈良井宿でも地元の人と話す機会があり、店として残っているのは僅かで、店じまいや、家を残して移転したり、通いで何とか維持したりとのこと。現実に、人の流れは少なく、例にもれず、外国人が多く目についた。我が家でも、写真を残せたので、高山・白川郷・木曾路が縁遠くなるのは必定で、写真集で何とか見どころをピーアールできないかと、問題点と合わせ、できるだけ詳細に写真を披歴した。

尚、銀婚旅行の全貌は、当サイト、本館の「文学館」「小説」「時の旅人」「五時の旅人」に記してある。
※銀婚旅行で呼んだ詩・木曾路編

時の旅人

昔の町の面影を 色濃く残す馬籠宿
情緒あふれる道行きは 銀婚夫婦にふさわしく
二人の心を結びつけ はるかな時の旅人に
難所だらけの中山道 足軽やかに闊歩する

戯言

旅の宿でしたためし 五十路男の心持ち
愛しき妻の語り部に 我が人生を捧げんと
明日への思い高ぶれど 時の流れをぎょうしかね
先行き見えぬ人生に ペンの進みもままならず
妻籠の宿の一時の 戯言として忘れ去る

意気込み

思うがままに生きたいと その気になって旅立つて
見るもの全て書き残し 集大成が我が人生
決するものと意気込むが 時間に追われてお手上げに

主役

亭主任せの道行きは 控えめがちに振舞うが
舞台に立てばしやしやりでて 主役の顔で舞い踊り
その可憐さに目を見張り 亭主慌てて後ずさり